

「明治学院学」ヴィジョン

真崎 隆治

言語コミュニケーション学部の新設がとりざたされていた頃、設立準備委員であった当時一般教育部の嶋田教授あたりを中心にして、全学共通科目に明治学院に関わる科目をおくことが検討されていた。それは単なるアイデアの段階にとどまらず、新設学部の全学共通科目カリキュラム4本柱の1本として、かなり具体的な輪郭をもって描かれていた。全学共通科目には、一般教育科目とちがひ、他大学には見られない本学ならではの科目群として、明学生のアイデンティティーを形成する要素も必要であると考えていたので、この実現を楽しみにしていたが、同学部構想挫折とともに、明治学院学の原型ともいふべきこの着想も絵に描いた餅に終わった。

しかしながら、希望は途絶えなかった。全学共通科目をはじめとする本学の教養教育について検討し実践を提唱していく役割を担う教養教育センターが設立されたのである。ここに明治学院に関する科目群構想が再浮上したのは当然である。

その一方において、橋本茂教授から、キリスト教研究所で明治学院学を構想しているとの話を伺った。お互いに無関係に発想されたものであっても、いやむしろそれだからこそ、今日の明学学生に何か意味あるものを提供しようという思いが同じところに至ったのが面白かった。なお、「明治学院学」なる呼称は橋本教授の命名である。

7月のキリスト教研究所一泊研究会で明治学院学がとりあげられ、すでに『あんげろす』第28号に示されていた橋本構想の説明を受け、それが現実感をもって語られるようになった

のは一つの前進であったが、まだとりたてて目新しい議論にはならなかった。この場で私の述べたことは、キリ研プログラムは、将来的にはともかく、現段階では履修単位にはならないことと、センターとしてはカリキュラムが総花的なものになるのは好ましくないと考えていることであった。

こうしてみると、キリスト教研究所で構想しているものと、教養教育センターで検討中のものとは、一見道筋を異にしているようだが、実は対立するものでないばかりか、補完的に関わりあえることが明らかになったと思われる。すなわち、学生への啓蒙的な色彩と学外の人々への働きかけの可能性を持つ研究所プログラムと、全学共通科目としてより専門的な視野から各論的に構築されていくであろうセンター・カリキュラムとにひとまず弁別したうえで、担当者の相互乗り入れや各年度のそれぞれの内容の有機的な関係の検討など、綿密に協力しあうことによって、個別には獲得できない広がりや豊かさを展開していくことができるであろう。いま「明治学院学」が必要であるとの共通認識にたつこの両者の関係からよき実が産みだされ、10年後、明治学院について喜びをこめて語る卒業生たちが甚に満ちていることを、私は今から夢見ているのである。

(まざき たかはる

所員・教養教育センター教授)

